小林（こばやし）　隆（たかし）

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文第218号
学位授与年月日	平成17年6月9日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	**方言学的日本語史の方法**
論文審査委員	（主査） 教授　齋藤倫明　教授　千種眞一 教授　才田いずみ 助教授　大木一夫

論文内容の要旨

本論は日本語史の研究に方言学の視点をもちこむことにより、従来の文献重視、中央語中心の歴史記述を見直し、新たな史的研究の可能性を提示することを目的としたものである。従来、日本語史の記述は文献を資料とし、京都や江戸などの中央語について行うのが一般的であったが、方言を資料に加え、全国を対象に据えることで、これまでの方法ではとらえきれなかった日本語の歴史の解明をめざす。具体的な語史・文法史の記述とともに、方法論の検討に力を注ぐ。

全体は、第1部「理論・方法編」、第2部「中央語史編」、第3部「方言史編」から構成される。

第1部「理論・方法編」

ここでは、方言学的日本語史の目的と方法論について論じる。まず、第1章では、従来の日本語史研究に対する本書の立場を明確にし、方言学的日本語史の目的を設定する。次いで、方法論の考察に移り、第2章では文献学的方法と方言学的方法とを総合する手続きを、第3章では方言の歴史資料としての性格を検討する。さらに、この研究を支える資料面の充実をはかるために、第4章では地方語文献の開拓を、第5章と第6章では通信法による全国分布調査法の開発を行う。

第1章　方言学的日本語史の目的

「方言学的日本語史」とは方言を視野に入れた日本語史研究のことである。なぜ、ことさら方言を視野に入れるのかといえば、それは、従来の日本語史が十分省みなかった部分に光を当てることで、新たな

歴史研究の発展が望めると期待するからである。すなわち、これまでの日本語史は、文献を使い、中央語について行うのが普通であった。このような方法や対象の限定は研究の遂行にとって必要なことだったが、一方で、狭隘な印象の拭えないことも事実である。歴史の研究に文献を使うのは当然としても、一部知識人の手になる文献をもって、都に暮した人々の言葉のすべてを解明しうるとはとうてい考えられない。方言を通して見ることで、文献を資料とするのとは違った中央語の姿が明らかになるはずである。また、言語史の研究として中央語を優先することに異論はないものの、それが地方語への無関心につながるのは賛成しがたい。日本語を、中央語や共通語だけでなく、地理的変異を含んだ広い概念と考える立場からすると、全国のことばについて歴史を明らかにしなければ、真の意味での日本語史とは言えないことになる。

方言学的日本語史は、このような問題意識から出発している。上の議論を踏まえれば、方言学的日本語史のアプローチには次の二つの方向が考えられる。

(a) 文献を資料としてきた中央語史の見直し

(b) 方言史（地方語史・全国語史）の構築

(a)は方言の分析によって歴史を推定し、そこから従来の文献主導による中央語史に再検討を加えようとするものである。特に方言の庶民・口頭語的性格を生かし、日本語史における位相的な視野の拡大を意図する。この場合、目的は中央語史の研究にあり、方言はそのための資料としての役割を担うことになる。

一方、(b)は方言それ自体が目的として設定されている。すなわち、中央語の影響が各地域に波及し方言が形成されていく様子はどのようなものであったのか、あるいは、そうした中央語の流れに地方独自の言語的営みはいかに交渉をもったのか、といったことについて考える。その地理的スケールは一地方から全国に及び、東西差や周圏分布の成立など方言形成史の重要課題にも挑んでいく。

ただし、(a)と(b)とは実際の研究においては峻別できないし、すべきではない。(b)の方言史に含めた全国語史とは、中央語史をその中心に据えるものであり、(a)の成果は(b)に反映される必要がある。また、(b)の作業を地方から中央へと逆に辿ることによって(a)が可能になるとみなすこともできる。つまり、(a)と(b)とは表裏一体の関係にあり、方言学的日本語史というひとつの世界の二つの側面を示したものと言える。

この章では、以上のような方言学的日本語史の目的について論じる。

第2章　方言学的日本語史の方法論

方言学的日本語史の方法論の特色は、その総合性にあると言ってよい。日本語史の方法を全般的に整理すれば次のようになる。

⑴文献学的方法

⑵方言学的方法

①主たる方法：　比較方言学、方言地理学

②補助的方法：　社会方言学

③前提的方法：　記述方言学

方言学的日本語史では、これらの方法のどれかに頼るのではなく、相互に対照し合ったり、補足し合ったりしながら用いることに努める。これは、従来の研究がもつ方法論的純粋さが、反面、現実の複雑な状況をとらえきることの障害になっていると感じるからである。利用できる方法論はなるべく多く利用することで、日本語史の豊な流れを多角的にとらえたいというのが方法論的総合性のねらいである。

例えば、方言の成立に関わる研究は、前世紀、主として比較方言学と方言地理学によって発展を遂げた。ただ、この二つの方法は互いに相反するものとして、対立の構図の中で理解されすぎた印象がある。しかし、現実の方言形成は外的伝播と内的変化の両方によってなされるのがむしろ普通で、片方の方法のみでは説明が困難な場合が多い。万葉語「めぐし（愛し）」一語を取り上げても、この古語がメンコイとなって東北地方に残る点は方言地理学的な解釈（外的伝播）があてはまるが、形態・意味の両面で独自の変容を遂げているのは比較方言学的な説明（内的変化）に頼らざるをえない。これからの研究においては、比較方言学と方言地理学とを柔軟に取り込んだ総合的な方法論が必要になるのである。

比較方言学と方言地理学の例は、上の分類では方言学的方法内部の総合性の問題である。しかし、従来もっとも隔たりが大きいと考えられてきたのは、より上位のレベルの文献学的方法と方言学的方法との関係である。文献学的方法と方言学的方法とは、その方法・資料において大きく異なるため、それぞれの構成した歴史に食い違いが生じるのはむしろ当然のことと言える。従来の研究ではこの不対応を放置し、個々の方法論の内部に閉じこもって研究を続けてきた。しかし、そのような不対応こそ、両方法の性格の相違に注目しつつ止揚を図ることで、より高次な歴史に至ることができるはずである。方法論を総合することの最大の意義は、文献学的方法と方言学的方法の両方の成果を生かした、視野の広い、厚みをもった歴史の構成にあると考えられる。

本章では、これまでの研究の反省の上に立ち、まず文献学的方法、方言学的方法それぞれの内部における手続き上の問題点を取り上げる。次いで、両者を総合する際に生じる問題を吟味し、特に、文献上の出現状況と分布上の様態との対応関係について検討を加える。以上により、方言学的日本語史の方法論を体系的に論じる。

第3章　日本語史資料としての方言の位相

書記言語で書かれた文献から口頭言語の断片を拾い集め口頭言語史を記述する作業には、おのずと資料の性格からくる限界が存在した。それにもかかわらず、文献を資料とする以外に口頭言語史記述の最上の方法は考えられないというのが、これまでの日本語史研究の中心的な立場であった。しかし、通時的研究の方法としては、文献を扱う日本語史研究の主流からは外れるものの、方言地理学や比較方言学など方言学的方法が存在する。そして、そのような方言による日本語史研究を、書記言語史・口頭言語史という観点からとらえなおすならば、それは、まさしく口頭言語史を明らかにするためのものであるとみなされる。なぜならば、方言が反映する日本語史の文体的な位相は書記言語ではなく、口頭言語であると考えられるからである。方言学的方法は、その資料的側面から見て、口頭言語史の解明に寄与するものと言える。

もう一点、文献学的方法に対して、方言学的方法の特質を付け加えたい。それは、階層的な位相という観点から見て、方言学的方法が構成する歴史は、文献学的方法とは異なり、下層に属する人々の歴史であるという点である。すなわち、文献学的方法は、時代による程度の差こそあれ、基本的には文字を所有する上層知識階層のことばを対象とするのに対して、方言学的方法は文字を持たない庶民階層のことばの歴史を明らかにする。これも、方言学的方法が資料とする方言の性格から必然的に導き出される特徴であり、やはり通時的研究におけるこの方法の有力な存在理由として注目すべきものである。

結局のところ、日本語史研究における方言学的方法は、階層・文体という位相面から見れば、庶民階層の口頭言語史に寄与するものということになる。その点で、上層知識階層の書記言語資料から庶民階層の口頭言語史を発掘せざるをえない文献学的方法の壁を、方言学的方法は一歩でも越えることのできる可能性を秘めている。この章では、そうした方言のもつ史的位相性を、伝播の原理からの考察と、『枕

草子』におけるある詞章の検討、および、方言分布の分析によって明らかにする。

第4章　日本語史資料としての地方語文献の開拓

方言学的方法は現代の方言を資料として歴史を推定する。この推定をより確実なものとするためには、過去の言語層の直接のサンプルといえる地方語文献が重要な手がかりとなる。そうした地方語文献としては、従来各地の方言集をはじめ、古文書、キリシタン資料、東国系抄物などが利用されることがあったが、この章ではさらに、近世の農書が有望であることを論じる。

近世、農業の発達にあいまって、全国各地で編まれるようになったのが農書である。農業の具体的実践方法について述べたものを中心に、豪農である庄屋・名主・肝煎などの手に成るものが多い。これらの上層農民は藩政の末端機構に位置してはいるが、一方で農作業に従事し村人との共同生活を送った。したがって、彼らの方言的基盤は、彼らが生育し土に還った村の方言と認めてさしつかえない。農書には、土地のことばそのままで記そうという著者の執筆態度が表明されることがあるが、これは農書の実用的な性格からみても当然の態度と思われる。また、実際、語彙の面、とりわけ農業語彙について方言の使用が頻繁に認められる。農書は全国各地で作成されたため、これまで試みられることの少なかった全国的視野からの過去の方言分布の把握が可能なのである。

この章では、そうした農書の地方語文献としての有効性を、「糠」と「籾殻」の方言を例として実証する。農書をもとに近世における「糠」と「籾殻」の全国方言分布図を描き、現代の分布と比較することで、数百年間の変遷を明らかにする。

第5章　日本語史のための通信調査法の開発

方言を調べる場合、普通はフィールドワークといって、調査員が現地におもむき方言話者と接触する。そのとき、話者に調査の趣旨を説明し、所定の事項を質問する面接調査法がとられることが多い。これに対して、現地に出かけることはせず、郵便などを利用して質問票を話者に送り、回答を得る方法が通信調査法である。通信調査法は、方言地理学的調査の初期の段階によく利用されたが、最近では面接調査法に対してあくまで二次的な手段と考えるのが常識となっている。通信調査法には面接調査法に比べて、回答の質量共にさまざまな問題があることは確かであり、より確実に回答の得られる面接調査法が優先されたことはうなずける。

しかし、伝統的方言の衰退が急速に進む今日、日本語史の記述に方言学の成果を生かそうとする立場からは、一刻を争う資料収集のための調査が必要である。そうした研究上の要請を踏まえたとき、広範囲を短期間に、しかも安価なコストで調査できる通信調査法の利点は評価されてよい。通信調査法を利用することで、全国の伝統的方言を緊急に収集する方法が検討されるべきなのである。そもそも、通信調査法が面接調査法に比較してどのような点でどの程度問題なのか、具体的な事例の対比に基づいて検討されたことはほとんどなく、実態の把握が求められる。また、通信調査法と一口に言ってもさまざまな方式があり、それらの結果の比較から、より有効な通信調査法を開発していくことも必要である。

本章では、以上のような課題に対して、岡山県津山市で行った実験的調査から通信調査法の有効性と限界について検討する。

第6章　日本語史のための全国方言調査の試み

方言学的方法によって日本語史を記述しようとするとき、なによりも充実した全国方言資料が必要になる。しかし、従来の方言資料には、最初から日本語史の研究に役立てることを意図して収集されたも

のは多くない。したがって、実際に研究を進めていく中で、資料不足によるさまざまな問題が現れてきている。

国立国語研究所が1966年から1974年にかけて刊行した『日本言語地図』全6巻は、全国的な方言資料として最大級かつ信頼性の高いものであるが、やはり上記のような問題を抱えている。この地図集の項目選定にあたっては、日本語史との連携という発想は十分でなく、少なくとも、文献学的方法との対比の上で興味深い項目を積極的に取り上げようとする姿勢は弱かったと言える。これはもちろん、研究の順序としてまず方言上興味深い項目を優先するという方針によったためであり、それを批判するのはあたらない。しかし、文献学的方法との対照作業を進める段階で、さらにこういう項目の方言分布もわかっていれば、歴史の構成においてもっと充実した結論が得られるはずだという関連項目が現れてきた。特に、多様な用例が存在し、意味的に広い視野をもちうる文献学的方法との対応の上で日本語史を編もうとするには、方言地図の方でもあらたに関連意味項目の方言分布を明らかにし、意味的視野を拡張する必要がある。そのような意図に基づく調査は、『日本言語地図』の発展的な研究の一環としても重要である。

本章では、以上のような課題に対して、実際に『日本言語地図』関連意味項目の全国調査を実施する中で、日本語史の記述を目指した調査項目の選定方法や調査法のあり方について検討する。

第2部「中央語史編」

第1部で論じた方言学的日本語史の理論、方法論に基づいて、具体的な日本語史の記述を試みる。それにより、本論の立場の有効性を主張する。

方言学的日本語史の目的は、大きく「中央語史の見直し」と「方言史の構築」とに分けることができる。第2部では、前者の課題について検討する。

日本語史の方法には、前述のように文献学的方法と方言学的方法とがある。前者は文献を資料とする方法であり、一般に日本語史といえばこの方法を使用するのが普通である。一方、後者は現代方言を資料とする方法であり、具体的には比較方言学や方言地理学などが該当する。文献資料の乏しい地方語史や、広く日本中を視野に入れた全国語史を目的とするには、当然、方言学的方法の比重が大きくなる。それならば、従来、文献学的方法の独壇場であった中央語史において、方言学的方法の出番はないかといえば、やはりその意義は大きいと言える。なぜならば、文献によってたどられる日本語史は、基本的に上層知識階層における規範性や文芸性に満ちた書記言語の変遷だったのであり、その陰に隠された庶民階層の口頭言語の歴史を、方言学的方法が照し出してくれることが期待されるからである。もちろん、これまで文献学的方法においても、そうした庶民口頭語史の姿を、文献へ露頭する徴証を丹念に発掘することでなんとか探ろうとされてきた。しかし、資料性としての限界をもつ以上、それが一般庶民の話し言葉の豊かな歴史をとらえるのに、これまで満足のいく成果をもたらしてきたとは必ずしも言えないのである。

方言は、その性格から判断して、庶民階層における話し言葉の推移を直接反映する史的資料と評価される。この方言の特質を生かすことにより、これまで文献によって消極的にしか把握されなかった下層の日常語の変遷を、積極的に解明することが期待される。そして、ここでも、文献学的方法との連繋を通じて、位相的視野の拡大という日本語史のひとつの深化が果たされるにちがいない。本論で「位相論的語史」と名付けるのは、そうした文献と方言との垣根を越えたところに成立するあらたなる日本語史を構想したものである。

第2部では、そのような方言学的日本語史の立場を、語史を中心とした事例研究によって実践してみ

せる。

まず、第1章「「頬」の語史—文献と方言の不対応—」では語史研究における文献と方言との不対応の問題を具体例で概観する。次に、第2章から第8章にかけて、そのような不対応を克服し、位相的な視野の広がりを備えた「位相論的語史」の記述を試みる。具体的には、第2章「「顔」の語史」、第3章「「眉毛」の語史」、第4章「「踝」の語史」、第5章「「薬指」の語史」、第6章「「コマ（駒）」の位相」、第7章「「雄馬」の語史」、第8章「「一昨日」の語史」となる。さらに、第9章「「旋毛」の語史—中央の移動と名称の変遷—」においては中央語の地理的背景が語史に及ぼす影響を明らかにし、第10章「格助詞「へ」の歴史—文法史への発展—」ではこの方法の文法史への応用について考察する。

第3部「方言史編」

第3部では、方言学的日本語史のもうひとつの目的である方言史の構築をテーマとする。

「方言史」とは方言の歴史のことである。現代の日本語に方言差が存在するのは、背景にそれを生み出したことばの歴史があったことを物語る。この、ことばの歴史ということでは、すぐに「日本語史（国語史）」という用語が頭に浮かぶ。これは、日本語（国語）の歴史という意味であるが、いまその中味を地理的広がりの観点から分類すれば次の3種類になる。

①中央語史＝中央語の歴史

②地方語史＝中央語以外の地域のことばの歴史

③全国語史＝①＋②

「中央語史」とは、中央語、すなわち歴史的に政治や文化の中心であった土地におけることばの歴史を指す。したがって、奈良、京都・大阪、江戸（東京）と、中央の変遷にともなって語史の舞台も移り変わる。各時代の規範的なことばとしての位置を占めることと、資料が豊富に残っていることから、従来、日本語史と言えば、中央語史を指すのが普通であった。

これに対して、中央語を除いた地域のことばの歴史が「地方語史」である。地方といっても、市町村単位の狭いものから、東北地方、中国地方といった広範囲に及ぶものまで、対象の広さに応じてさまざまなレベルがありうるが、いずれも中央語を含まない点で地方語史ということになる。方言史と言った場合、このような各地の方言の歴史を指すことがある。地方語史と同じ意味で使われる方言史を、「狭義の方言史」と呼ぶ。

「全国語史」とは、地理的に全国的な広がりを対象にした日本語史を言う。上記の中央語史と地方語史とを合わせたものがそれに該当する。地方語史はそれぞれの地域のみで完結しているものではなく、隣接地域など他の地域の地方語史や中央語史との関係の上に成り立っている。したがって、それらを個別に扱うのではなく、全国的な視野のもとで総体として扱う必要が出てくる。例えば、東西日本の方言対立とか、東北方言と九州方言の一致などといったテーマを論ずるには、中央語史との関連を含めた全国的な視点が求められる。方言史と言った場合、このような全国的なことばの歴史を指すこともある。全国語史と同じ意味で使われる方言史を、「広義の方言史」と呼ぶ。

方言史には、結局、次の2種類があることになる。

a. 狭義の方言史（＝地方語史）

b. 広義の方言史（＝全国語史）

このうち、一般的にはaをもって方言史とするのが普通である。中央語史は地方語史と区別されることが多く、方言史の中に中央語史を位置付けて考えるというbの発想は弱かった。しかし、上で述べたように、中央語史は畿内から関東へその舞台を移しており、地理的連続性の面で一貫性に欠ける。中央の

位置から退いた畿内のことばがその後どう変遷していったのか、あるいは、中央に昇格する以前の関東のことばはどのようなものだったのか、という観点は中央語史と地方語史とを峻別する立場からは生まれてこない。このような課題に応えるためには、中央語史を方言史の一環に位置付け、同じ視野のもとに把握することが必要になる。また、各地の方言史はそれぞれの地域のみで完結しているものではなく、隣接地域の方言史と影響関係を結んでいる。その関係をたどっていけば、狭い地域の方言史はより広い地域の方言史へと組み込まれていき、最終的には全国が一つの方言史として統合されることになる。そのとき、中央語史は、その影響力の強さからいって方言史の階層構造の中で、頂点に位置するかなめとしての立場を与えられるはずであり、これを除いて全国的な規模での方言史というものは考えられない。あるいは逆に、地方から中央への言葉の流れも存在し、そのような影響が中央語史を展開させるひとつの原動力になっていることも確かである。

このように見てくると、中央語史を方言史の一環として位置付けるbの立場の意味が納得される。中央語史と地方語史とを分けて考えるのではなく、両者を結びつけた広義の方言史が必要であり、それは同時に通時研究がめざすべき最終的な日本語史の姿であるとも言える。その意味で、中央語史に偏った従来の日本語史（国語史）は、方言学的日本語史の立場からの再検討が求められる。

第３部では、以上のような立場から、方言史の構築を試みる。まず、第１章から第４章では、歴史的中央語から各地の方言形式や言語体系が成立する様子を事例研究により明らかにする。特に、日本語方言の分布類型として典型的な周圏分布を取り上げ、その形成過程に見られる歴史的中央語の再生現象に注目する。具体的には、第１章「格助詞「サ」の歴史」、第２章「終助詞「ケ」の歴史」、第３章「副助詞「コソ」の歴史」、第４章「動詞活用の歴史」となる。また、第５章「東西対立分布の形成」では、周圏分布と並んで日本語方言に顕著な分布類型である東西対立分布の成立過程を検討する。そして、第６章「日本語方言形成モデルの課題」では以上の論述を整理するかたちで方言形成モデルの構築に向けた将来の課題を述べる。

最後に、本論の発展に向け「今後の課題」の章を設けるとともに、末尾に、「文献用例出典一覧」「文献一覧」「事項索引」「語句索引」を付した。

論文審査結果の要旨

本論文は、「第１部　理論・方法編」（全６章）、「第２部　中央語史編」（全10章）、「第３部　方言史編」（全６章）、の３部22章から成る。

第１部は方言学的日本語史の目的と方法論について論じたものである。

「第１章　方言学的日本語史の目的」では、真の意味での日本語史を描くためには、文献学的方法と方言学的方法とを総合することによって従来の中央語史を見直すことと、地方語史と中央語史とを包括した広義の方言史としての全国語史を新たに構築することが必要不可欠であることを述べる。

「第２章　方言学的日本語史の方法論」は、文献学的方法と方言学的方法とを総合する手続きについて論じたものである。まず、文献学的方法、方言学的方法（特に方言地理学）の有する問題点について整理し、その上で、両者による歴史推定に不対応が生じる場合どのような要因が考えられるのかについて、様々な観点から考察を加えている。

「第３章　日本語史資料としての方言の位相」では、方言の歴史資料としての性格について論じ、方言

学的方法は、階層・文体という位相面から見れば、庶民階層の口頭言語史に寄与するものであり、文献学的方法による庶民の話し言葉の発掘には限界があることを考えると、日本語史資料としての方言の役割が非常に大きいことを主張する。

第4章から第6章は、方言学的日本語史を支える資料面をいかに充実させるか、という問題について論じたものである。「第4章　日本語史資料としての地方語文献の開拓」では、地方語文献として近世の農書が有望であることを指摘し、実際に「糠」と「籾殻」について調査・分析した結果を報告する。「第5章　日本語史のための通信調査法の開発」「第6章　日本語史のための全国方言調査の試み」は、方言調査法の一つである通信調査法を取り上げ、実際に通信調査を行なった経験から、通信調査の有効性と限界とについて考察したものである。

第2部は、方言学的日本語史の二つの課題のうち、「中央語史の見直し」に取り組んだものである。

これまで文献学的方法の独擅場だった中央語史の記述に対して、比較方言学や方言地理学といった方言学的方法が貢献できる点を考えてみると、前者が基本的に上層知識階級における規範性や文芸性の濃厚な書記言語の変遷を明らかにするのに対し、後者はその陰に隠された庶民階層の口頭言語の歴史を照らし出してくれる、という点が挙げられる。従って、文献学的方法と方言学的方法とを総合するならば、従来の中央語史よりも位相的視野の拡がりを有する語史が描けるはずである。

以上のような基本的認識に基づき、まず「第1章　『頬』の語史―文献と方言との不対応―」では、語史研究における文献と方言との不対応の問題を概観し、次に第2章から第8章までの7章では、そういった不対応を位相的視野の拡大という方法によっていかに克服すべきかを具体的に論ずる。各章に「位相論的語史の試み」という副題が付されているのはそういう意味である。すなわち、「第2章　『顔』の語史」「第3章　『眉毛』の語史」「第4章　『踝』の語史」「第5章　『薬指』の語史」「第6章　『コマ(駒)』の位相」「第7章　『雄馬』の語史」「第8章　『一昨日』の語史」であり、いずれにおいても、これまでの国語史研究の成果と『日本言語地図』を中心とした方言分布図とを対照することにより説得力のある論が展開されている。

さらに「第9章　『旋毛』の語史―中央の異同と名称の変遷―」では、日本語史に及ぼした中央の移動の影響について論じ、「第10章　格助詞『へ』の歴史―文法史への発展―』では、方言学的日本語史の文法史への応用について論ずる。

第3部は、方言学的日本語史のもう一つの課題「方言史の構築」に挑んだものである。「方言史」と言う場合、一般的には、各地方地方の方言の歴史を指すが、本論文では、そういった地方語史に従来の中央語史をも加えた全国語史をも方言史の一つとして位置づけようとする。その背後には、地方語史（これにも様々なレベルがある）はそれだけで完結するのではなく、他地域の地方語史や中央語史との関係の上に成り立っているということ、および中央語史は歴史上、畿内から関東へと舞台を移しており地理的連続性の面で一貫性に欠ける、という把握が存在する。

以上の基本的認識に基づき、第1章「格助詞『サ』の歴史」「第2章　終助詞『ケ』の歴史」「第3章　副助詞『コソ』の歴史」の3章では、「方言形式の成立」という副題の下、文法形式（助詞）を対象とし、歴史的中央語から各地の方言形式が成立する様を明らかにしようとしたものである。これらの形式の全国分布は、いずれも周圏分布が何らかの理由で東西のバランスを崩した「アンバランスな周圏分布」の様相を呈しているため、その形成過程を具体的に明らかにすることによって、日本語方言形成史論に一定の貢献ができるという考えである。

続く「第4章　動詞活用の歴史―言語体系の変遷―」は、動詞「起きる」を例とし、活用を方言地理学的に扱うことによって、日本語方言における活用の分布と歴史のアウトラインを描こうとする試みで

ある。

「第５章　東西対立分布の形成」は、日本語方言形成史論の一環として、周圏分布と並んで日本語方言に顕著な分布類型である東西対立分布の成立過程を検討したものであり、「第６章　日本語方言形成モデルの課題」は、周圏論や孤立変遷論といった従来のモデルを検討するとともに、歴史的中央語の再生といった現象に注目することによって、新しい方言形成モデルを構築しようとする試みである。

以上、本論文は、従来の日本語史が文献学的方法・中央語史偏重であった点を批判し、通時的研究が目指すべき最終的な日本語史は、位相的視野を拡大すること、すなわち、方法論的には、文献学的方法と方言学的方法とを総合し、地域的には、地方語史と中央語史とを含んだ全国語史を広義の方言史と位置づけることを通してのみ可能であるという認識に基づき、「方言学的日本語史」という新しい立場を提唱したものである。その発想は斬新であるが分析は手堅く周到であり、従来の国語史、方言学双方の成果を充分に利用しつつ、日本語学の中に新しい方法論とパースペクティブを提供した点で高く評価できる。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに充分な資格を有するものと認められる。